

# 桐生保健所管内における最近5年間の 主要死因別死亡の観察

桐生保健所 (所長 金沢凱夫博士)

三 丸 昭 子  
ミ マル ショウ コ

(受付 昭和35年2月16日)

## 1. は が

我國の死亡者について死因順位の変動をみると、明治、大正、さらに昭和25年までを通じて第1位を占めていた全結核は、昭和26年、27年には第2位となり、昭和28年には第5位と漸次減少している。しかるに最重要死因であったこの全結核にかわつて、急激に中枢神経系の血管損傷による死亡が第1位を占めてきたことが注目される。最近の予防医学において、脳卒中に対する対策は一日もゆるがせにできない問題である。そこでこのような状況から著者は、桐生保健所管内において、最近5カ年間の主要死因別年令別死亡率について年代的推移を観察し、全国における平均死亡率と比較しかなる変化を示すかを統計的に観察を試みたので、ここにその成績の概要を報告し、諸賢の御参考に供する次第である。

## 2. 資料及び調査方法

- 全国の統計資料は「厚生指標」に拠つた。
- 桐生保健所管内における昭和29年～33年までの主要死因別及び年令別死亡数については、同所発行の統計資料を詳細に検討して用いた。主要死因は9大死因について、桐生市と全国平均を比較観察したものである。

ただし桐生保健所管内は旧桐生市旧大間々町を中心として、東部及び東南部の平坦地は栃木県に隣接し、交通の便よく、医療ないし衛生機関の分布も比較的恵まれているが、北西部の山間地区は人口稀薄で交通不便のため、生活環境は極めて悪い条件の下におかれている。

## 3. 調査成績

桐生保健所管内主要死因別年令別死亡数について、昭和29年より33年までの5カ年間における年次推移は表1のごとくである。

一般にこの5カ年間を通じて中枢神経系の血管損傷、悪性新生物、心臓疾患、肺炎による死亡はほとんど同様の順位を示すが、全結核は昭和30年に一時減少を示した

が再び上昇して第5位を占め、また老衰や胃腸疾患が減少していることは近時化学療法ないしは抗生物質をはじめ薬物の研究が飛躍的に進歩したことが窺われ、また、事故死が急上昇しているのは、そのほとんどが交通事故であることから交通量の頻繁が考慮される。

さらに詳細にみると、

- 中枢神経系の血管損傷によるものは年々増加している。昭和29年には全体の19.7%、239人を占め30年19.7%、31年19.9%、32年20.2%、33年22.5%、251人に増加している。

年令別にみると29年には70～74才までの死亡が最も多く、30年からは65～69才までが最高で、70～74才が2位となつている。33年までは、同じように65～69才までの死亡者が多く、次は60～64才、次に70～74才という順にかわつてきていることがわかる。

- 悪性新生物によるものは、昭和29年の140人11.6%が30年には172人14.0%と急激に増加を示したが、31年、32年と漸次減少し、33年には再び増加して163人となり14.6%となつた。年令的には昭和29年は55才～59才までに多く、60～70才までが最高となり60～55才と僅かずつ減少している。

- 心臓疾患によるものは、昭和29年には96人で7.9%であつたが、30年には114人で9.3%に増加し、以後31年127人、32年125人、33年117人10.5%となり次第に増加の傾向にある。

年令的には昭和29年には60～64才、70～74才までが最も多く順次減少しているが、33年をみると65～69才が最高で60才は急に減少し、50～40才と若年層になるにしたがつて減少している。

- 肺炎によるものは、昭和29年には73人で6.0%であつたが、30年には61人5.0%に減少をみたが31年85人6.6%、ついで32年92人7.6%と増加し、33年になつて減少

表1 主要死因別死亡数(桐生保健所管内) 昭和29~33年

	年度	総数	0	1	2	3	4	5	10	15	20	25	30	35	40	45	50	55	60	65	70	75	80	85	余不詳	
			才	才	才	才	才	才	才	才	才	才	才	才	才	才	才	才	才	才	才	才	才	才		才
1 中枢神経系の 血管損傷	29	239			1						1	1	1	1	7	12	29	27	33	37	42	28	18	1		
	30	242								1	2	1	4	4	13	28	17	28	50	37	31	21	5			
	31	255									1			5	13	22	29	34	44	37	41	23	6			
	32	244									1		1	2	2	7	21	28	24	47	49	37	20	5		
	33	251	1										1	1	2	11	11	23	49	54	33	44	18	3		
2 悪性新生物	29	140						1	1		1	3	4	9	10	11	14	19	17	17	18	11	3	1		
	30	172		1					1			2	1	2	9	8	18	27	36	21	27	13	6			
	31	168		1	1					2		1	4	5	4	11	23	22	29	28	23	12	2			
	32	155				1	1	1	1	1		2	2	4	4	11	11	21	22	30	24	16	4			
	33	163			1				1	1	2	2		8	6	11	13	20	27	28	20	15	7	1		
3 心臓の疾患	29	96						1	1	1	5	1	1	1	5	3	10	9	16	11	16	8	5	1		
	30	114						1	2		3	2	5	3	3	3	8	9	13	16	14	16	8	8		
	31	127		1			1	1	2			2	5	3	7	8	7	5	12	15	21	23	10	4		
	32	125	1		1			3		1		3	7	1	4	9	8	8	10	19	15	21	10	4		
	33	117							1		3	2	4	2	2	3	6	7	11	21	18	15	15	7		
4 肺炎 (新生児を含む)	29	73	12	9	4	3	3		1		2				1	1	2	1	3	7	4	10	6	4		
	30	61	22		3	2	2										2	3	2	4	7	4	5	5		
	31	85	39	2		1		5	3	1		1	1			3			6	3	5	7	5	3		
	32	92	31		1	2	1	3	1			1	1	2	2	1	3		8	5	12	7	8	3		
	33	63	13	3			4	4	2	1	3	2			1		1	1		6	9	4	5	4		
5 全結核	29	95		2				1		4	11	12	8	9	12	7	8	4	5	6	5	1				
	30	63	1				1	1	2	1	7	9	5	4	1	3	10	6	6	2	4					
	31	65		1		1		1	1	4	5	5	4	9	6	6	6	5	3	3	4		1			
	32	65				1	2			2	1	4	3	8	6	8	7	8	7	3	4	1				
	33	47		1				2		2	2	3	3	2	5	3	5	9	3	3	4					
6 精神病の記載 のない老衰	29	61																		7	17	12	14	11		
	30	65																		7	15	10	20	13		
	31	76																		3	12	18	22	14		
	32	63																	1	2	10	17	12	21		
	33	42																1		2	5	15	13	6		
7 胃炎, 十二指 腸炎, 腸炎及び大腸 炎	29	64	6	2		2	2	1		2			1	2	2	3	3	2	2	8	11	10	3			
	30	70	8		2	2	1	2	1		1			1		3	4		6	11	6	9	9	4		
	31	58	6				3	9		2		1						2	3	4	9	7	8	4		
	32	39	4	1									1		1				4	2	9	6	7	4		
	33	40				1		2								2	1		3	4	10	5	9	3		
8 不慮の事故	29	48	1	3	2	2	1	4		2	4	2	3	7	5	4	2		4	2						
	30	43		3	1	3	1	3	2	3	2	3	3	3	1	3	2	3		1	2	2	1	1		
	31	52	2	4	3	1	1	2	1	6	3	6	3	1	2	5	4	2		3	1	1		1		
	32	23		1	3			1	3	2	1			1	1	1	1	1	1	4	1	3				
	33	45	1	1	3	1	2	3	2	3	2	5	3	1	1	5	4		1	3	1		1	2		
9 自殺	29	43								2	11	5		1	2	4	1	3		6	3	3		2		
	30	34								5	7	5	2	2		4	2		1	3		1		1	2	
	31	43								4	7	3	4	4	1	3	6	3	5	2	1					
	32	38								6	10	2	3	2			2	3	5		3	1			1	
	33	33							1	4	4	6	4	1	3			2	2	3	2	1				

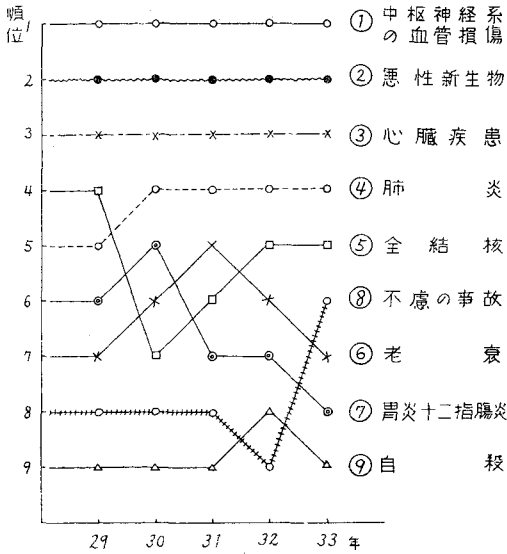


図1 死因順位

し63人5.6%となつた。年令的にみると年少者に多く、中年者には少く、高令者になつてやや増加している。

すなわち33年をみると0才13人、1才3人、4才、5才は各4人、70~74才が9人、80~84才5人、85才以上4人という数字を示している。

5. 全結核によるものは昭和29年には95人で7.8%であつたが、30年より63人5.0%に急激に減少し、31年65人5.1%、32年65人5.4%、33年47人4.2%と漸次減少してきた。

年令的には昭和29年には年少者に少なく、20才より次第に多くなり、40才で12人、50才、60才、70才は大差なく各4~5名である。33年には年少者になく20才で2人、これより50才まで大差なく、59才で9人に増加している。以上のように結核による死亡者は年次減少を示している。これは結核の治療の如何に進歩したかが窺われる。

6. 老衰によるものは、昭和29年には61人5.3%、30年65人5.3%、31年76人5.9%、32年63人5.9%と大差なく、

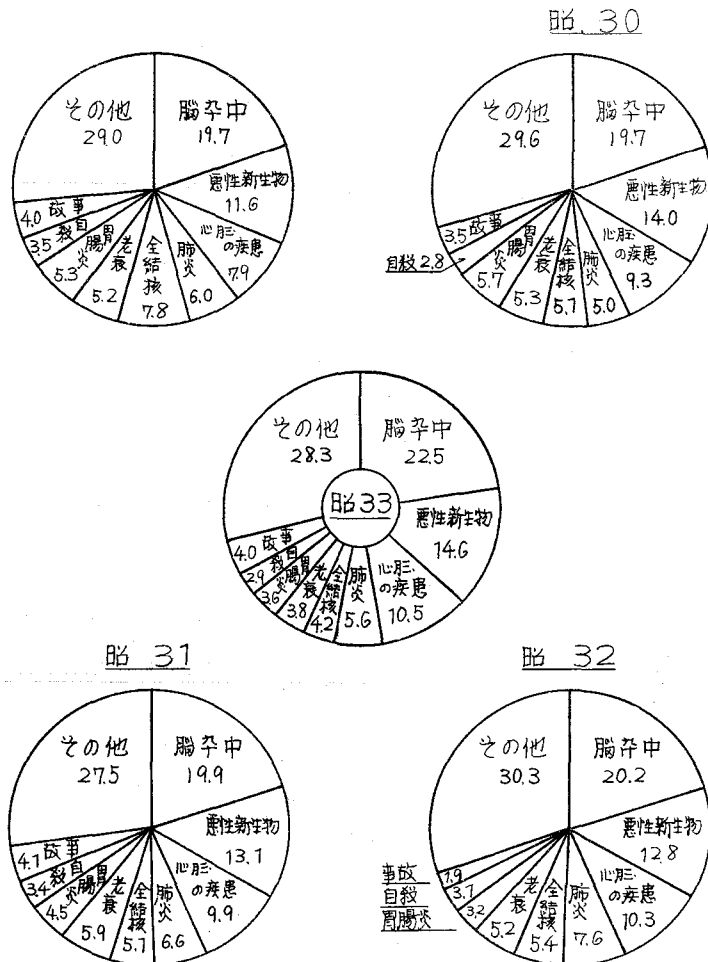


図2 主要死因比較表 (%)

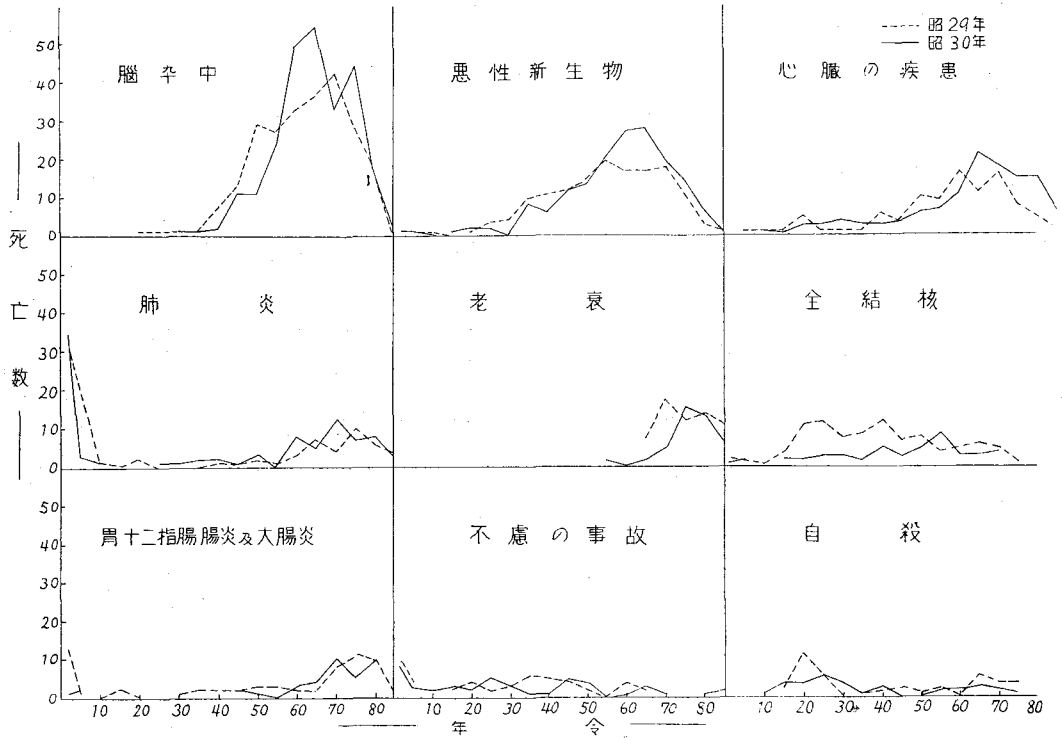


図3 年令との関係

33年になって3.8%42人に減少している。

年令的には第1表のごとく60才より80才までに限られている。

7. 胃炎、十二指腸炎、腸炎及び大腸炎によるものは、昭和29年には64人で5.3%、30年70人5.7%、31年58人4.5%、32年39人3.2%、33年40人3.6%と減少している。

年令的には29年には0才と70才以上が上位を示しているが、33年には若年者にはほとんどなく、60才3人、65~69才4人、70~74才10人、80~84才に9人というように高令者のみと変化をみた。

8. 不慮の事故死は昭和29年には48人4.0%、30年43人3.5%、31年52人4.1%、32年23人1.9%、33年45人4.0%の数字で示すごとく32年に急激に減少しているが他は変化をみとめない。又年令的にも表1のごとく年令的に差異をみとめない。

9. 自殺によるものは昭和29年には43人3.5%であったが、30年には34人2.8%に減少し、31年3.4%、32年3.7%とやや増加し、33年には33人2.9%にまた減少している。年次的変化はあまりみとめられないようである。

年令的にみると15才位より75才位までにみられる。

表2 主要死因死亡率年次比較表 (人口10万対)

桐生保健所

	29年		30		31		32		33		備考
	全国	管内	全国	管内	全国	管内	全国	管内	全国	管内	
中枢神経系の血管損傷	132.4	150.6	136.1	152.5	148.2	160.7	151.5	153.8	148.4	158.2	
悪性新生物	85.3	88.2	87.1	108.4	90.5	105.9	91.2	97.7	94.9	102.7	
心臓の疾患	60.2	60.5	60.9	71.9	65.4	80.0	72.6	78.8	64.3	73.7	
肺炎(新生児を含む)	54.7	46.0	48.9	38.4	48.9	53.6	59.0	58.0	47.6	39.7	
全結核	62.4	59.9	52.3	39.7	48.5	40.9	46.8	41.0	39.3	29.6	
精神病の記載のない老衰	69.5	39.7	67.1	40.9	75.7	47.9	80.4	39.7	55.4	26.5	
胃炎、十二指腸炎、腸炎及び大腸炎	39.0	40.3	31.7	44.1	29.9	36.6	25.7	24.6	12.9	25.2	
自殺	23.4	27.1	25.2	21.4	24.1	27.1	23.9	23.9	25.3	20.8	
不慮の事故	39.4	30.3	37.3	27.1	36.7	32.8	37.7	14.5	38.6	28.3	

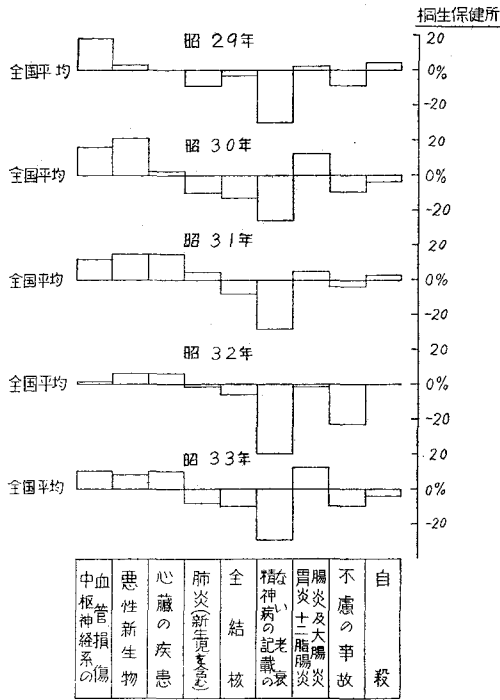


図4 全国平均と管内死亡率との比較表

まとめ

以上の調査によつて全国平均の主要死因別死亡率と桐生保健所管内のそれを比較すると、図4及び表2の通りである。すなわち29、30、31年は中枢神経系の血管損傷による死亡は全国の平均より上まわっているようである。32年には減少し全国平均よりやや多い程度になったが、33年にはまた増加の傾向を示しているので桐生保健

所管内の方が全国平均よりかなり多いことがわかる。

悪性新生物によるものを比較すると、昭和29年には、全国よりやや多い程度であつたが、30年には急激に増加し、31年、32年、33年ともに全国平均より多い。

心臓疾患によるものは、昭和29年、30年は国平均とほぼ同数を示したが、31年に急激に増加し、32年、33年は全国よりやはり多い。

肺炎の死亡者は昭和29年、30年は全国より少なく、31年に多少の増加を見たが32年、33年と次第に減少している。全結核の死亡者は全国に比較して29年、30年、31年、32年、33年とも少い。老衰による死亡者は、全国平均の方がはるかに多い。胃炎及び十二指腸炎、腸炎及び大腸炎の死亡者は、昭和29年には全国平均とほぼ同じであつたが、30年、31年と増加し、32年には減少したが、33年に急激に増加している。不慮の事故死によるものは全国平均よりわずかに多かつたようであるが、30年、31年、32年、33年ともに少ない。

全国平均と桐生保健所管内を比較した結果によつて脳卒中による死亡者が非常に多いことが特に目だつていると思われる。これは桐生保健所管内は中小企業地である桐生市を中心としているため女子の勤労者が多く、婦人が職業線上に活躍していることに基因するものとも窺がわれ、又山間部の部落を多く含むため生活環境も悪く医療機関の分布も少なく衛生思想にとぼしい結果に影響しているとも考えられる。

稿を終るに臨み御校閲いたぞいた桐生保健所長金沢凱夫博士ならびに、御助言いただいた東京女子医科大学衛生学教室諸岡妙子助教授に深謝いたします。